

2010年5月10日

京都新聞/夕刊 2面

# 現代のことは

やまだ  
山田 玲子



テレビのCMで流れる歌のせいか、招き猫が静かなブームになっているらしい。先日、三条大橋のたもとにある檀王法林寺を訪れたところ、右手をあげた黒い招き猫の置物が並んでいた。ご住職によれば、寺社関連では日本最古の招き猫とのこと。即物的なものの見方しかできない私には、招き猫は耳を掻いている姿にしか見えず、猫の首に小判をぶらさげて商売繁盛を祈願する行為は滑稽に思っていた。ところが、ひっそりした

お寺のたたずまいのせい、か、そのお寺の黒い招き猫は私を別の世界にいざなっているように思えた。「確かに、黒猫は私を招いている」。同じしぐさの置物でも、置かれる場所によって見る者の感じ方がこんなにも違うのか。それとも、このお寺の招き猫には神通力があるのだろうか。そんなことを考えていると、いつの間にか意識は研究を始め、た頃にタイムスリップしていた。

私は、人間や動物のコミュニ

## 必然と偶然

ケーション力の獲得に興味を持ち、研究者としての歩みを始めた。そのきっかけは、母が私に真面目に言った「今日、『らんちゃん』が真っ青になったのよ」という一言だったような気がする。「らんちゃん」というのは、飼犬の名前で、犬種はバグ。黒い顔が真っ青になるわけはない。思わず笑ってしまったが、母には本当にそう見えたのだと思う。

大学ではハエの学習や記憶の研究をした。ハエだつてちゃんと学習できるし、シヨックを与えると覚えたことを忘れてしまう。大学院では九官鳥の物まね音声の研究に関わった。あるとき教授が見せてくれたビデオに衝撃を受けた。アメリカの研究室にいる九官鳥が流暢な英語をしゃべっていたのだ。考えてみると、九官鳥は単に物音を真似ているだけなので、日本の九官鳥が「コンニチワ」と発声することと同じことだが、そんなことに衝撃を受けた自分自身がおかしかった。

生物が表出する情報は脳から発信されている。対峙する相手の脳は、その情報を読み取り、発信者の意図を解読する。しぐさ、表情、ことばなどいろいろなものがこの過程を媒介するが、発信者と受信者で共通の道具立てを持たない限り、うまく伝わらない。飼犬と飼主は一緒に生活する間に、飼主が話しかける言葉、犬の鳴き声、双方のしぐさ等、お互いに分かりあえる道具立てを確立する。しかし、その確立にはお互い学習する時間も、時として努力やテクニクも必要だ。いろいろな不思議に思うことがあり、学習や音声についての興味が膨らみ、いつしか若い頃は嫌いだつた英語の学習方法を自分の研究課題とするようになっていた。

人間も動物も学習の積み重ねで個を確立していく。このこと自体は必然の過程と言つてよいだろう。一方、人生の岐路を決めるのは他愛もない出来事の積み重ねのように思う。人生は必然と偶然が織りなす作品なのかもしれない。そして自分の場合は、その節目節目に動物がいた。お寺で出会った招き猫は、私にそんなことを教えてくれたような気がする。

(ATRラーニングテクノロジー協会 会長)